

～輝きの子育て～

小さな人生論

いま、いちばん読まれている「人生論」

根を養う 根は大事である。

植物が生き生きと生育していくのに欠かせないのが根である。土中の目に見えない働きがあって花は咲き、葉は生い茂る。人間も然りである。人が人生という時間軸の中で自らの花を咲かせていくには、根がなければならぬ。根を養っていない人はいささかの風にも傾き、倒れる。植物も人間も自然の摂理の前には等しく、平等である。中で特に根を養うのに大事なものは、忍辱ではないだろうか。

相田みつを氏に「いのちの根」と題する詩がある。

なみだをこらえて かなしみにたえるとき
ぐちをいわずに くるしみにたえるとき
いいわけをしなくて だまって批判にたえるとき
いかりをおさえて だまって屈辱にたえるとき
あなたの眼のいろが ふかくなり いのちの根が ふかくなる

かいぶつせい む

開物成務 開物成務＝深く心に響くものがあつた

「放置しておけば宿命になってしまう問題を豁然として新生命を開かせる」環境、状況、事柄、人事—自分の周囲にある「物」を開いて、すなわち開発し、あるいは変革し、あるいは打破して、自己の成すべき努めを果たしていく。さらに言えば、自分の運命を完成させていく。それが人生を生きる秘訣であることを、この四字熟語はおしえている。

作者は不明だがこういう詩がある。ここにも開物成務の心得が説かれている。

生涯の旅路

私は私の一生の旅路において 今日というこの道を再び通ることはない
二度と通ることはない 二度と通らぬ今日というこの道
どうしてうかうか通ってなろう 二度と通らぬ今日というこの道
嘲笑されてそこで反省するのだよ 叱られてそこで賢くなるのだよ
叩かれてそこで強くなるのだよ 一輪の花でさえ風雨をしのいでこそ
美しく咲いて薫るのだ 侮辱されても笑ってうけ流せ
蹴倒されても歯をくいしばって忍べ 苦しいだろうくやしいだろう
しかし君、この道は尊いといわれた人たちが 必ず一度は通った道なんだ

悲しみの底に光るもの

悲しみは突然やってくる。そして、悲しみの姿はいろいろである。

「悲しみを愚痴にしてこぼしたり、憎しみに変えたりせず、悲しみを大事にする人は、なかなか抜け出すことのできない病の中から。ついに抜け出すことができる」

坂村 真民さんの詩が思い出される。

かなしみは みんな書いてはならない かなしみは みんな話してはならない
かなしみは 私たちを強くする根 かなしみは 私たちを支えている幹
かなしみは 私たちを美しくする花 かなしみは いつも枯らしてはならない
かなしみは いつも湛えていなくてはならない
かなしみは いつも嘯みしめていなくてはならない

片野 英子

引用文献 小さな人生論③ 藤尾 秀昭著